

運動部活動における勝利至上主義に関する研究～特にバスケットボールに着目して～

Victory Supremacy of School Club Activities

～A Study On High School Basketball Teams～

1K03B155-1 氏名 半澤愛子

指導教員 主査 友添秀則 先生 副査 吉永武史 先生

【本論文の動機・目的】

私は小学生の頃にバスケットボール(以下「バスケット」と略す)と出会い、現在も体育会のバスケット部に所属している。私が高校生のときは、優勝するのは男女ともに毎年同じ高校が常連であった。

しかし、ここ数年でその伝統が一変し、セネガルや中国からの外国人留学生選手を擁している高校が優勝したり、上位に進出したりするようになった。日本人選手より高さ・能力ともに高い彼らは、勝利至上主義の風潮のある高校や監督には最適の選手と言える。

最近では、外国人留学生選手は増加傾向にあるが、このような状況が続けば、高校バスケットは勝利至上主義に触まれ、バスケットが本来備えている教育的な機能を果たすことができなくなるのではないかと危機感を感じる。

このような理由から、本研究では真の高校バスケットの在り方について検討していきたいと思い、本論文のテーマを設定することにした。

【本論文の方法】

本論文は、関連文献の購読による文献購読による文献研究によって行う。しかし、バスケットに関する文献は決して多いとはいえないため、インターネットによる検索情報も参考にする。

【第一章】

わが国のスポーツは、世相を反映しながら時代とともに発展してきた。戦前は、体力や精神力を鍛えるということの主目的にした軍事的活用という色彩が強いものであったが、現在は一分化領域としての確立がみられる。

また、競技スポーツの発展も学校教育に拠るところが大きく、小学校のクラブ活動、中学校・高校・大学における部活動の実践が競技スポーツを発展させている。とくに、高校の運動部活動は、高校生の心身の成長・発展に大きく寄与し、スポーツが持っている「競い合う」という本質が、対する相手との競い合いだけでなく、自分自身を高めようとしたり、相手を敬い感謝したりすることが人間的な成長にも繋がるといえる。しかし、残念ながら、現在の高校の

運動部活動は勝利至上主義に触まれ始めているため、前述した教育的な機能を果たすことができなくなっている。この現状を確認するために、次章では現在の高校バスケット部における問題点について検討していく。

【第二章】

バスケットの創始者であるJ.ネイスミスは、バスケットの在り方について「バスケットをプレーする目的は、人間性を育てることであって、金を稼いだり、多くの観衆をかき集めたりするようなことではない」と、呈している。しかし、現在のわが国の高校バスケットは「外国人留学生選手問題」ならびに「体罰問題」などの勝利至上主義に触れつつあり、彼が理想としたバスケットが展開されていない。特に「外国人留学生選手問題」については、彼らを擁するチームの急激な成績上昇の問題だけでなく、指導者のみの利益のために、外国人留学生選手を勝利のための「手段・道具」として起用している現状についても明らかにしていく。このような指導者の倫理的問題は、「体罰問題」でも深く関わっていることを本章で明らかにしていく。

【第三章】

前章では、勝利至上主義の高校バスケットの現状を明らかにしたが、この章では新しい方策をさまざまな観点から提案し、本来の高校バスケットの在り方について述べる。

【結章】

この章では、本来の高校バスケットの在り方を教育的効果の観点とともに、本論文全体のまとめを述べる。また、高校バスケットの指導者としての心構えや、今後の課題についても述べ、運動部活動における勝利至上主義に関する考えをまとめる。